自己や時代を見つめた個性的な作品が並ぶ「崇城大芸術学部卒業展・大学院芸術研究科修了展」＝熊本市中央区

集大成の芸術 個性豊か

崇城大の卒業・修了展 県美分館で始まる

崇城大の芸術学部卒業展と大学院芸術研究科修了展が25日、熊本市中央区の県立美術館分館で始まった。学生たちが自己や時代を真摯に見つめ、独自の表現に挑んでいる。3月1日まで。

卒業展は17回目、修了展は15回目。テーマは「円」で、実行委員長の藪ノ内伽南さんは「東京五輪を迎える2020年に一体となり、展覧会を発信したいという願いを込めた」という。絵画や彫刻、デザインなどを専攻する47人が各1点出品している。

中村妃菜さん（大学院2年）の日本画はクレーンが立ち並ぶ熊本城を描写。にじみを生かした夕刻の空を背景に、岩絵の具を厚く重ねた城郭が復興の象徴としての存在感を伝える。

奥森日向子さん（4年）の自刻像は、エネルギーを与え続ける太陽のようになりたいという希望を、素材として4年間向き合ったブロンズや木、石こうなどで表現した。

生活の中の5色に着目して色の意味や印象を問う写真作品や、茶卸業者の聞き取りを基に手掛けたパッケージデザインや商品開発も目を引く。

（魚住有佳）

2020年2月27日　熊本日日新聞　P.15